読者のページ

芹谷川のひまわり

企画財政局　高橋　正幸

この夏、久しぶりに我が町を散策した。見慣れた芹谷川の岸に沿って五mほどの間に、二〇本もあったろうか、ひまわりが行儀よく一列に並んでいた。立て札に曰く、『このひまわりは、スペインアンダルシア地方のものです。』

港南区には、「ひまわり親善国際交流協会」という民間団体がある。区にバックアップされ『将来に羽ばたく子供たち』のため、二十一世紀の港南区＝〝太陽のまち〟づくりに一役を買っている。『光あふれる〝ひまわりの里〟スペイン・アンダルシア地方の都市と住民相互の文化交流を深める』と言うのが、その主な活動である。

芹谷川のひまわりは、協会設立の折、スペインから贈られた種が花開いたものである。

しかし、それにしても何ともはや「もやし」みたいなひまわりたちであった。

散策と言えば、昨年の、これも、夏、東京都小平市へ一週間の泊込み研修に出かけた。日中はともかく、朝夕の自由時間に暇に任せ玉川上水に沿って武蔵野の町々を見て歩いた。

小平、小金井、国分寺。武蔵野、三鷹、国立など。同じ様な市が、同じ様に武蔵野の雑木林と巧みに共生し、複雑に境を入り組ませながら広がっている。どの市も同じ様に東京のベッドタウンであるはずなのに、歩いて見ると、不思議と市の境を感じさせる。また、取り立ててどこがどうだと明確に答えられないが、なぜかどの市も、路地裏の隅々にまで行政が行き届いていると言った印象を与えた。サービスの仕方が旨いのか、それとも住民が受上手なのか。詳しい事は解らない。しかし、一つ言える事があるとすれば、それは「町の規模」かも知れない。平均、一一～一二万の人口と、二〇㎢の面積。地方の行政にとって、それは小回りの利く適当な大きさなのかも知れない。本市で言うなら、さしずめ中区か栄区と言ったところだろうか。

昭和六〇年一二月、横浜の人口は遂に三〇〇万人を突破した。大都市中第二位となった。『今になるぞ。近く超えるぞ』と、行政は騒々しく進んだ。しかし、人口に対応する行政のサービスが十分に行き渡る前に、遂に『超えて』しまった。サービスは、増えた分だけ薄まる恰好になるのだろうか。手放しに喜べない第二位である。それにしても、三〇〇万人は如何にも大きい。三〇〇万ともなると、住民も色々で、それを反映する「町」も様々な表情を見せる。首都志向型、地元固執型、そして我関せず型まで。

これらの町を一まとめに「国際港都」のキャッチフレーズはいささか乱暴かも知れぬ。日頃の生活からはなかなか出にくい実感である。乱暴であれ何であれ、まずは三〇〇万人を牽引する旗印として「これも止むなし」とするなら一歩譲ろう。が、それとて一気に「三〇〇万人」を相手に物を考えるから、問題もややっこしくなるのではないか。住民にとって大切なのは、大きな「都市（まち）づくり」よりは、むしろもっと身近な「町づくり」ではないだろうか。国政ならばいざ知らず、地方行政の最大の利点の一つは、住民に対する反応の「良さ」、「早さ」にあったのではないか。ふと、あの武蔵野の町々が頭をもたげた。

九月半ば、再びあのひまわりを見に出かけた。花は無く、弱々しい茎だけが風にかすかに揺れていた。アンダルシアならぬ芹谷川のひまわりたち。改めてもう一度眺め直すと、あの「いじましさ」は、いつしか「いじらしさ」に変わっていた。

〈あとがき〉

子どもが育つ環境に視点をおいたまちをつくろう、という活動が各地で行われている。

これらの活動は、子どもたちの生活の中に、身近な自然とのかかわりや友だち同士の豊かな遊び、楽しく安らぎのある生き生きとした空間の創出をねらったものである。これらの環境は昭和三十年代以降の急激な社会構造の変化によって、現在の子どもの生活に十分に保障されているものではなくなってしまった。このことが、子どもの成長発達のプロセスに何らかの影響を与えたのだ、という認識が今、反省とともに語られている。

今回の特集は子どもの育つ環境形成に様々の立場から関わっている人々の報告集でもある。それぞれの報告は、結局、私たち大人の生活や仕事の仕方の見直しを迫っているようだ。そのための多くのヒントが盛られていると思う。

〈中川〉

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一―二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。